

---

# 背中の妹

HS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

背中の妹

### 【著者名】

ZZマーク

N7987F

### 【作者名】

H.S

【あらすじ】  
気づけば、いつもぼくの背中には妹がいた。ちょっとシユールで  
切ないお話です。

## プロローグ

ぼくらは、生まれたときからひとつだったんだ。  
これからもずっと……やつのかな……。

---

「ちょっと、君達！」

ひやしぶりによく晴れた日曜日、

ぼくらは、気持ちよく風を受けて走っていたつていうのに……。  
また自転車の一人乗りといつことで、呼び止められてしまつた。

ぼくは、定期のようにこいつの証明書と中学の学生証を警察のおじさんに見せる。  
すると、おじさんは不思議な顔をしながら、ぼくらの足のまつを見て……

何事もなかつたように、「気をつけるんだよ」と言つて  
無理な笑顔をしながら、手を振ってくれる。

……まあ、いつものことだ。

そう……ぼくらは、生まれたときからひとつだった。  
なぜだか知らないけど、ぼくの背中……

正確には、背骨の付け根あたりから、ぼくたちは枝分かれしている。

つまり、上半身が2つあるつうこと。

だから、妹はいつも、どんなときでも、ぼくの背中にいて、

今日は一緒に自転車に乗っている。

まあ、足のまづき、こつもぼくの担当だから、妹は歩くつて感覚を知らないんだと思つ。

「また、呼び止められたやつたね、お兄ちゃん。」  
妹は、ちょっと不満そうに言つけれど、  
ぼくは、まんざらでもなに気持ちもする。

妹がやつ言つてくれると、心強いくらいが、なにか安心した。

「コンビニ、寄つていつよー。」

梅雨が明けたと思つたら、今日はこきなり暑い……。

「おし、了解ー。」

「あたしは、ソフトクリームをお願いしますー。」

一応、胃袋は別々だから、妹も腹は減る。  
まあ、あたりまえか……。

最近は、ダイエットだの何だのつて言つてるわりには、なんか、ぼくの肩甲骨あたりにとめども柔らかい感触が……  
てなことは、鼻血が出ても言えなことで……。

コンビニ着くと、ぼくは自転車のかばに折りたたんでたものを取り出す。

さすがに、自転車から降つると、さつそつと田舎で分かつやうので、妹をリュックにカモフラージュしてしまつのも、こつものこと。

「登山ですか？」とかよく言われるナビね。

もうそ、鼻血が出ても言えない件で、

じゃあ、妹は、結婚できるのかって、まだ早いけど、ときどき心配してしまつ。

妹に生殖器はないってことは、実は本人も分かってる?ことなんだけど……。

……妹は、恋愛とかしたいとか思つてるんだろうか。

^\_^(^\_)

## プロローグ（後書き）

これは、結合双生児の兄妹を軸として展開するお話です。異性の結合双生児というのは、あくまでフィクションですが、この兄妹を暖かく見守つていただけるとありがたいです。完結できるよう頑張りたいです。（作者）

「お兄ちゃん、好き嫌いはダメだよ…」  
そう言つて、妹は、箸でペーパーマンをつまむと  
ぼくの口に的確に押し当てる。

一人羽織りなんて、アホにしか見えない的確さで……。

「あのやー、たぶんペーマンHネルギーは、  
おまえの方からまわってくるんじやね……」

「なにカッコ悪い」と言つてんの?  
将来、恥ずかしいことになるのは、お兄ちゃんなんだからね!」

妹のくせに、母親のような口ぶりだ。

とは言つても、ぼくは、母親といつもの知らない……。

妹も知らないはずなのに、なんでこいつもしつかりしているものか。

母は、ぼくらを産んだときこそ亡くなつた。  
ぼくらの誕生日は、母の命日でもある。

父親も当然いるんだけど、今はお金を送つてくれるだけの存在だ。

だから、ぼくと妹は、今、二人でアパート暮らしをしていく。

「もひ、お湯たまつたかな」  
「あー、やべ……溢れてるかも……」

追い焼きができない風呂なので、風呂も一回で済むのはまあ……経済的かもしない。

「お兄ちやん……」

脱衣所で、後ろから妹がつぶやく。

ぼくは、なんのことだうと、後ろを振り向く。

「見たら、ぶつって言いたかったんだけどな……（怒）

そのあと後悔することになつたのは、言うまでもない……。

風呂でぼくの背中を、コシコシするのは、いつも妹の役目。いつも妹の運転手になつてお礼とことなつてゐる。でも、今日はいつもより、少し痛い気がする。

お湯につかる。

「……まだ、怒つてんのかよ」

「ちよつと、『めんど

「あ、あのや……」

妹は、少しそまなさつて聞か。

「べ……別に、見なければ、寄りかかるべりこなによ。」

「はー?」

「ほり、お兄ちやんも、柔らかいのとか……嫌いじゃないんでしょ

「・・・・・・・・・?」

「おっ、お前はソフナーか!!（笑）

と突っ込むのに、けつこう間が空いてしまつた。

内心、妹はぼくのソフナーになるため

生まれてきたとか思つと、  
どうしようもなく悲しくなつた。

＼＼＼＼＼

「お兄ちゅあん、電氣消すよー。」

「よひじべー。」

やうこえぱ、

電氣を消すのは、いつも妹のよつな氣がある。

一応言つとくナビ、ほひらむ、仰向けて寝る」とはできない。バランスも悪いし、第一、妹を下敷きにすることになってしまひ。

横向きか、うつ伏せで寝るのが、ほひらの通たり前。

ぼくとしては、ほほ妹の抱き枕状態で、

睡眠不足になつたことは数え切れない……。

でも、最近は、妹も気を配ってくれていてみみたい。

「あのさ……

なんですか、あーむー」と言つわけ?」

“ソフナー”の件で、ほくなちよつと怒つていた。

「別になんでもないって……

お兄ちゃんが喜んでくれたらと思つただけ……

「よ……喜ぶわけねーだろ! バカつ」

ぼくの肩をつかむ妹の指が少し震えていた。

「だつて……お兄ちゃん、あたしのせいで幸せになれない気がするから……。」

……妹は本気で泣いていた。

「あたしなんか、くつこてなけば、  
お兄ちゃんはもつと自由なんだつて……ずっと呟いてた。」

ちよつ、それ、中学生のいつやつつかー！？ とは、とても笑ひ込めない。

ぼくをいつも奴隸のように扱き使つ、元気な妹は、  
たぶん、ぼく以上にいろいろ気を使つていたのかもしけないと  
今になって気がついた。

「あーあ  
なに言つてんだか！」

ぼくは、背中で妹を押しつぶして、仰向けになつた。

「ちよーと、苦しい……よ。お兄ちゃん……。」

ぼくだって、妹を疎ましく思つたことだつてないわけじゃない。  
でも、もし逆の立場だつたらと想ひつと、ただかわいそうに思えただ  
けだ。

「どうだ！ まいつたか！  
これで満足かい？（笑）

「ハヤヒ茶化す」とぐりこしか、今のぼくにはできないんだ…  
。」

と思つてこたら、妹の振り上げた拳が、勢いよく床へ叩きつけられた……

「…………」

うよひ、されば反則だわやあ……

△△△△△

「一 起 も り 一 一 ！ ！」

耳にタコができるそうな、  
ぼくの耳元で響く。  
黄色い声が

• • • • •

……また朝が来た

きのことは  
激痛でしはし眠れなかつた気がするんだけと

そんなこともお構いなしに、とにかく妹は、朝が強い。

二。ひへい、いの細田

まあ、妹のおかげで学校に遅刻とかはないわけで、助かつてはいるわけだけど……。

肩をつかまれて、揺らされる程度で起きたら運がいいけど、仕舞いには、脇をしきょがしていくのでとても困る。

ぼくが起き上がらないと、妹も身支度できないわけで、妹も、まあ、とっても必死なわけ。

「ちよつとー、はやく、洗面所ーー……もおー、間に合わないじやないーー。」

「ちゅう！ その前にトイレトイレ…」

「はあ？！ そのくらい我慢しなさいよ。」

妹は、トイレといつものに対する理解がまるでなくて困るっ。  
毎日、2人分の排泄物を出す身にもなつてみろーーと叫びたいところだが……

食事の前にそれは絶対的にタブーだ。

「いやそれも一歩！」

妹は、毎の写真に向かって、前髪を整えつつ、いつも声をかける。  
ぼくは……妹が言ってくれるので、いつもだまつてゐる。

あのうせ、あんなに晴れてたのに、

雨もポツポツ降つてゐる。

「ええつと……かさかわー。」

い。  
二人乗りで相合傘とかつて、どんだけだよ（笑！  
とかつて友達に言われたりすることもあるけれど、  
傘は妹が持つてくれるわけで、まあ普通に便利だから、仕方がな

やつ……ほへりば、これでも中学に通つて

自転車をこいでるづち、雲の隙間から光が差ってきて、  
雨に濡れたアスファルトをキラキラ照らした。

↙ ↘ ↙ ↘

## H派ソード4

学校に着く頃には、雨はすっかりあがり  
自転車置き場の周りの木々は  
水滴を纏つて煌いていた。

「おっはよー、香奈ちゃん！」

同じクラスの女子が妹に声をかける。

「おっはよー、おっはよー！」

……妹のネーミングセンスは、イマイチ分からない。

「おっす！ 建治！ きょーも香奈ちゃんカワイイっす～！  
「はあ～？！」

一応、建治つてのが、ぼくの名前で、  
声をかけてきた、この見た田ばじつこのこと、口はやたら軽そうな  
人物は  
浩二つてこの名前。

ぼくはいつも、

ぼくと妹の名前が貼られた、ちょっと不自然な下駄箱に  
靴を出し入れする。

ぼくの靴は“ぼくらの靴”なんだって、いつもながら思つ瞬間。

キー・ン・コーン・カン・

「やんべつ！ 遅刻すつやー！」

浩一が叫んだ……。

……ついに、午後が来てしまった。

「おにーちゃん、おっそいやー！」

水しづきの音と女子の黄色い声が辺りに響く。

今日は午後から、体育で水泳の授業。

本来、水泳は女子だけで、男子は陸上といった感じなんだけど。  
まあ、妹は一応女子だし、  
もしものときには、水泳ができたほうがいいと先生に勧められた。

とはいっても、泳ぐのはいつもぼくの方で、  
妹はといえば、お気楽にイルカにでも乗つてんじゃないかという態  
度。

浩一のやつは、なんて羨ましいんだーーー！ とか言いつけれど  
ぼくは、ほんと堪ったもんじやない。

しかも、妹は、身体的にスクール水着とかは着れないみたいで、  
だからって、  
なぜだか、ビキニ……。

あつ…………ありえん…………。

ぼくのほうが恥ずかしい気がする。

そういえば、体育の時間はいろいろと人気者（？）になる。

逆立ちとかが良い例で、慣れたら4つの腕で4足歩行すらできてしまつことが発覚。

ありえねーーっ（笑涙！！

とかみんなから注目されたこともあった。

せうやつて、支え合つて、ぼくらはこれからも生きていくのと思つていた。

↙↑↓↖

## Hソード5

放課後の教室。

今日は田直で、少し残つて日誌を書いている。

とか言いつつ、クラスの人が書いた日誌に、つい読み入つてしまつた。

みんないろんなこと考えてるんだなと思う。

……妹は、どんなこと書いてるんだろうか。

そう思つた瞬間、

妹の短めの髪が、ぼくの耳と頬をかすめて、妹は、ぼくの右の肩に首を乗せてきた。

妹は……気持ちよさそうに、寝ている。

こんなこともりいつものことで……

窓から見える空は、まだ明るくて

テニスボールの打たれたり跳ねたりする乾いた音とか応援の爽やかそうな声とかが聴こえてくる。

廊下の奥からは、吹奏楽のボーンという低めの音。

廊下を走る運動靴の足音が周期的に響く。

すると、運動靴の擦れる音と同時に

「建治ー。」

右後ろから浩一の声が……

ぼくは振り返りつつ思つたけど、

妹の顔が視界を塞ぐ。

「あー、わーー…………お邪魔でしたか、そうですかっ」

浩一は、小さこ声だつたけど、激しく動搖している模様。

妹は、高い声で唸ると、

寝返りをうつ如く、首をぼくの左肩に乗せ変えた。

その時見えた、浩一の顔がなにかすこくて……

「なつ？！違つんだって、寝てるんだってつ  
ぼくもなぜだか、動搖。

」こんな状況でも起きない妹はすこー……。

浩一はしづらしく立ち去りしてから、

リタリタ歩いて、ぼくの右隣のイスに座つた。

「おまえって、やっぱ羨ましこやつだな

浩一があやしに笑顔でそれやく。

「まあ、かわいいとは、思ひなどや……」

妹が起きてたら、絶対言わないよつな」とを言つてしまつた。

浩一は、ふーんとう顔をしてから少し黙つて、

それから、妹の方をちら見して……

「実はや…… オレ、おまえに話すときたことどががあつてや」

「なんだよ。改まつて……」

「しーつー。香奈ちゃんが起きたやうじやんか」

「なつ、なにを今やり……」

「これは、男と男の約束だからな」

「おひ、おひ……」

「実はや……、オレ、香奈ちゃんのこと……好き、みたいなんだわ  
浩一は全開に顔を赤らめながら、せにかんだ。

▽▽▽▽▽

「…………」

いきなりのことで、それがどーいう意味なのか、理解するまでた  
だ黙るしかなかった。

いや、ほんとは、どんなに考えても答えなんてわからないのだけど。

当の本人は、ぼくの肩で寝ているわけで……

そういひしげるしきこ、元

「じゃ、よろしく！ オレ、練習もどるわ！」

浩一は、スッキリしたような朗らかな顔をして、  
スタスタ走つていつてしまつた。

スッキリしないのは、ぼくの方で。

“よろしく”つて……ぼくにどうしゆう……？

といあえず、日誌を急いで書き終えてから、妹を起こした。

「う～よく寝た！」

自転車に乗つているぼくの後ろで、妹が伸びをした。

ぼくは、夕陽に輪郭が光る雲をぽかんと見ながら、  
さつきのことを繰り返し思い出していた。  
人通りのない、まっすぐな道が続く。

と、いきなり視界が塞がれた。

キキー！！

ぼくは、ブレーキを握つてなんとか無事に自転車を止めた。

もちろん妹のしわざ。

「なつ、何すんだよ！？」

「なんか、お兄ちゃん、わつきから元気ないみたいだから」

なつ、何がしたいんだこいつは——！？

妹の行動は意味不明だが、見透かされているようすで、それ以上怒る気にはなれない。

「お、おまえもが、そういう危ない」とするなよな。  
一応、女の子なんだからや。」

「どうせ、いちお一つですよ。

わつきは……かわいいとか言ってたくせにいっ！」

妹はいかにも可愛気なさそうに口を大きく横に開く。

「はつ？！ んなこと……」

ぼくは、『わつき』といつ状況を思い当てるとい、呆然となつた。  
ぼくが、浩二にわつき不意に言つたこと……。

「…………おまえ、起きてたのか！？」

もう聞くまでもないんだけど。

妹は、ふふんと得意げな表情をして、

「せつかぐ、男友達水入らずな感じに氣を使ってあげたのになあ～」

妹はあの時、ぼくの背中でじんな気持ちでいたんだね。」

少しの沈黙の後、妹が口を開いた。

「人に好かれることは、しあわせなことだし、あたし、うれしいんだよ。」

「……。」

「でもね。あたし、お兄ちゃんと一緒にやなきゃ、生きてこられないと  
さえできなくて……。  
だから……『めぐね。』

まるで、浩一のなかのようだな……。

「まあ、いいんじゃね？ オレ、浩一のことは、嫌いじゃないけど。」

「お、お兄ちゃんって、そういう趣味だったの～！？」

なつ、なんでもわかるなあなう……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7987f/>

---

背中の妹

2010年10月8日13時07分発行